

「授業で学級経営」

先日、ある先生の授業を参観しました。学級の子ども一人ひとりの個性を捉え、上意下達でなく、ファシリテーター役に徹しながら、意図的に発言の少ない子どもや遅れがちな子どもを巻き込みながら、全員参加の授業をされていました。授業後にその先生を笑顔の子どもたちが取り囲んでいる様子はまさに、「授業で学級経営をする」姿に見えました。

「授業で学級経営をなささい」

私がまだ若手の教員だった頃に、校長先生からよくうかがった言葉です。

「授業は勉強を教える時間なのに、どうして学級経営をしないといけないのだろうか。」とあった当時の私は、「授業」と「学級経営」は別物と考え、授業では内容を進めることだけに一生懸命でした。そして、子ども一人ひとりが主役であるはずの授業なのに、時間不足を理由に、よく発言する子どもだけに目を向けて授業を進めてしまっていました。みんなに達成感や満足感が得られない授業の繰り返しでは、学級も授業も上手くいくはずがないことに、なかなか気付くことができませんでした。

どの学級にも、よく発言できる子どももいれば、本当は発言したい気持ちがあるのに、できにくい子どももいます。また、理解が進みやすい子どももいれば、そうでない子どもも必ずいます。いろいろな個性で学級は作られています。限られた時間の中でも、子どもたちを主役にしながら、みんなが「よく分かった」「できるようになった」と言える授業を目指したいものです。子どもを多面的に理解している学級担任だからこそ、一人ひとりを生かしながらよい授業をつくることのできるのです。